

朝の光がレースのカーテンを通して、瞳に突き刺さった。

ベッドの上で麻美が寝返りをうち、目蓋を開けた。視線がベッドの横に置かれた目覚時計を見る。

午前9時。

今日は休日であった。

彼女がベッドから身体を起すと、青のストライプ模様のはいったパジャマの胸のボタンが1つ外れ、その奥の白い乳房のカーブが揺れた。晩秋の朝にしては、暖かな朝だった。薄く寝汗に濡れた肌が、若い体臭を放つ。

麻美はベッドの横の大きな窓に向き直り、掛け布団を跳ねのけて、朝日を全身に浴びる。

本来ならば清々しい気分を味わい、楽しい休日の計画でも考える時なのだろうが、今の彼女は一抹の不安にも似たものを感じていた。その理由は、パジャマのスポンの中の白い下着の奥にあった。

あの日。あの、平尾の自宅に呼ばれ、陵辱され、その快樂にすすり泣いた日から、今日で4日が過ぎ去っていた。

この4日の間、平尾からもそして美佐子からも、彼女に連絡はなかった。勿論、学校では毎日のように顔を合せてはいたが、二人の態度はあくまで一女生徒に対するものでしかなかったのだ。本当ならば喜ぶべき事なのだろう、彼らに強要されるまでもなく、あの学校のトイレでの出来事は決して口外するつもりはなかったし、ましてや、あのホテルで撮影されたビデオテープがあるのだ。

もしかしたら……あの夜で終わったのかもしれない……。

そんな事も考え、微かな希望を抱いていた彼女であったが、昨夜ベッドに入った時、自分の身体が二人によって、いかに変えられてしまったかを自覚させられたのだ。

昨夜、彼女は突然に欲情を感じたのだった。それは、やっと治りかけた性器と乳首の傷口が回復する時の疼きによって触発されたものであったかもしれないが、その欲情の念は今までにない程に強く、そして深いものであった。

確かに彼女は、あの保健室で美佐子に罾られながら告白してしまったように、週に何度かのマスターベーションを習慣としていた。しかしそれはあくまで、股間に挟み込んだ手の平を太股でリズムカルに圧迫して性器を外側から刺激したり、時折指で肉壁に触れ、陰核をさするといった程度のものであり、味わう絶頂も、平尾によって教え込まれたものと比較すると、まるで軽い悪戯程度のものであったのだ。

昨夜、彼女はベッドの上で掛け布団にくるまった身体を自らを抱しめるように丸め、腰の中心部に芽生え、全身に燃広がつていく欲望の炎を押え込もうとしたが、そうすればする程に身体はますます熱く火照り、目は冴えわたっていった。

そして何度目かの寝返りを繰返した後、ついに彼女は欲情に屈伏したのだった。恐々にパジャマのスボンの中に手を差し入れ、性器の肉壁の合せ目に指で触れ、膣口をまさぐってみると、そこは自分でも驚く程に熱く濡れ、軽く触れただけであるのにもかかわらず、その快感は寒気を覚える程に強いものだった。

指先に触れる愛液の感触も以前のものとは違い、明らかに濃くヌルヌルとしたものに変っていた。そして充血した肉壁の熱さ、包皮の中で痛いほどにその存在を主張する陰核。肉の欲望。

一旦、それらのものを自覚してしまうと、彼女の脳裏から快楽に対する忌諱が拭い去られるように消滅し、あの二人によって罾り尽くされた時には、泣き叫ばずにいられないほどに惨めで苦痛にまみれていた事さえも、欲情の材料に変貌した。

それは、恐ろしくなる程に、強く激しい欲望であった。腰が自分でも意識しないうちに動きだし、膣からトロリと愛液が滲みだす。

彼女は欲情のままに、唇を噛み、漏れだしそうになる喘ぎの声を押えつけて、自らが生み出す快楽を貪り始める。

そしてその時、激しいマスターベーションの快楽に熱い息を吐き、身悶えする彼女の脳裏に描き出されたものは、平尾と美佐子によって陵辱の限りを尽された時の自分の姿であり、その時に味わった恥辱であり、苦痛であった。

彼女は、ベッドの中でその思い出したくもない筈の経験を追体験しながら、今までのマスターベーションでは経験したことのない程の深く激しい三度の絶頂を貪った後、その疲れきり火照った身体のまま眠りについたのであった。

そして今朝。昨夜の淫らな行いの名残がハッキリと彼女の股間と記憶に染み付いていた。下着は滲みだした愛液と汗に汚れ、性器には微かな違和感が残っている。

わたしはイヤらしい女だ……。

彼女はまるで、清々しい朝日を避けるかのようにベッドの上で姿勢を変える。

お風呂に入って身体を洗おう……、昨日の夜の汚らわしい汚れを洗い流してしまおう、擦って、

湯に流してしまうんだ……。

しかし、そう思いを巡らせた時、性器に石鹼をつけ、乾いてしまっているだろう愛液の残滓をタオルで洗い落す事を考えた時、再び彼女は欲情を感じる。

ああ……ダメ……、ダメよ……。

しかし一旦、深い性の味わいを覚えてしまった身体に対して、その抵抗はあまりに儂いものであった。身体が再び欲望に火照りはじめ、外れた胸のボタンの奥から香る薄い体臭がわずかに濃くなっていく。

麻美が再びベッドの上に横たわり、レースのカーテンを通して差し込む朝日の中で、パジャマのボタンを外す。零れ出した2つの胸の膨らみの上では、既に乳首が固く起立していた。

まだ色の薄い肉の突起を指でつまみあげた時、彼女は溜め息をつき、乱れはじめた息で乳房が緩やかに上下しだした。指が動きはじめると、わずかに開いた唇から熱い吐息が漏れる。麻美の身体の奥底で肉欲が蠢き、そして全身を赤く染め上げていく。

既にためらいを捨てた手が、パジャマのスボンと、昨夜の愛液の名残で汚れたパンティを下ろすと、絡み合っている陰毛が震え、その奥の既に濡れはじめている肉の合わせ目からは強く牝の匂いが漂いだした。

朝日が満ちるベッドの上で、パジャマの前を開き、スボンとパンティを膝に絡み付かせた麻美が快樂を貪りだす。

部屋の中に若い女の汗の匂いと淫らな牝の匂い、そして低い喘ぎ声が漂いはじめた。

シャワーを使おうと、パジャマのまま階段を下りた時、廊下に置かれている電話が鳴った。

「はい、美樹崎です」

受話器を取りあげ、応える麻美の耳に女性の声が聞こえる。その瞬間、手が強く受話器を握り締めた。美佐子の声であった。

「おはようございます、麻美さんお願いしたいんですけど」

その声は、麻美の家族を考慮してか丁寧なものだった。

麻美が一瞬、息を飲み、答える。

「はい……、わたしですが……」

美佐子の口調が変わる。

「フフ……、お前だったの……。今、平尾先生の家であるホテルでのビデオを見ているところなのよ、でも主役がいなくっちゃ今一つのれなくてね、今からこっちに来なさいよ」

テープ……。その言葉を聞いた瞬間、彼女の脳裏にあの日の苦痛とそして快感が過る。受話器を強く握っている手が汗ばみ、そこから漂い出す、愛液の淫らな匂いが意識される。

「聞いているの？」

微かに苛立った声が受話器から聞え、麻美が慌てて返事を返す。

「は、はい、聞いています」

「判ったわね、すぐに来るのよ。待たしてごらんさい、分かっているわね」

「……はい」

会話が途切れ、彼女が受話器を戻そうとした時、再び美佐子の声が聞えた。

「それと……」

受話器を耳に戻す。

「今日はあの時みたい、お前の後ろの方も髷って上げるから、綺麗にしてくるのよ、外も中もね……」

耳の中で響く含み笑いの声が、電話の切断の音で途切れる。

麻美が受話器を置いた。

*

熱い目に調整したシャワーの湯が、頭上から降りかかる。

ショートカットに切りそろえられた髪の毛が濡れ、湯に溶けた薄い汗の味を唇に感じる。瞳を閉じたままの顔に熱い飛沫が流れ落ち、首筋を伝い下りて乳房を愛撫する。湯が若い張りのあるなめらかな肌の上で粒となって跳ね散っていく。

彼女は全身を包み込まれるような湯の暖かさに大きく溜め息を吐き出し、まだ身体の芯の部分に執拗に残っているマスターベーションの余韻が消え去っていくような感触を味わう。

そんな彼女の脳裏に、先程の電話での美佐子の声が蘇る。——後ろも髷って上げるから、綺麗にしてくるのよ、外も中もね——

一瞬だけためらった彼女が、ボディシャンプーをまぶした手を股間に持つていくと、白くなめらかな泡の中に翳るような陰毛の黒が際立ち、昨夜からの二度のマスターベーションの名残である乾いた愛液が肉壁の狭間で溶けてシャンプーのぬめりと混じり合う。

中指がまさぐるように膣口の中に挿し込まれ、狭い肉穴をかき分けると湯の流れの中で乳首が持ち上がった。

……わたしはどうなってしまったんだろう、二人に髷られる準備をする為に、身体を洗い、それに感じてしまうなんて……。

彼女の反対側の手が腰の後ろから回り込み、豊かな尻肉の狭間に触れる。窄まった肛門の手触りが感じられ、平尾によって犯され、精液をそこに注ぎ込まれた時の事を思い出す。

今日もここを犯されるんだろうか……。そして、またわたしは……その苦痛と快感に泣くのだから

ろうか……。

指が狭い窄まりをこじ開けるようにして潜り込み、第一関節のあたりで筋肉の輪の締め付けを感じる。同時に感じた腸管の内壁に触れた時の奇異な感触が、平尾によってそこを嬲られ、舌を挿し込まれた時の快感を呼び覚ます。

「あつ……」

唇から囁き声が漏れ、股間の前後の2つの肉穴の中の指が蠢きはじめた。

麻美が床に両膝を付き、その身体にシャワーが降りかかる。股間で、薄い肉の壁を通して二つの指が同調していく。

求める絶頂をpushさえつけるようにして、伸ばした手が湯を出し続けているシャワーを取る。

湯量と温度を調整し、ノズルのネジを外す彼女の瞳は、pushさえつけたとは決して言えない妖しい輝きを湛えている。

手に握られた金具だけとなったシャワーのホースを、彼女は開いた股間をくぐらせるようにして肛門に押し付ける。

指の挿入によりほぐれ、そこに着いているシャンプーのために、比較的容易に肛門はホースの先端を受け入れ、彼女の中に湯を注ぎ込んでいく。

「うう……！」

彼女は眉を深く顰め、自らの注腸に喘ぎの声を上げながら、下腹部に湧きあがって来る膨満感に耐えるように、前のタイル張りの壁に手を付く。

限界はすぐにやって来た。

*

17インチの画面の中で、ホテルのバスルームの洗場に屈み込んだ麻美が、苦痛の悲鳴を張り上げ、汚物を撒き散らした。

自宅のベッドに全裸で寝そべっている平尾が、鈍く光る目で画面を見詰めている。その隣りでは、同じく全裸の美佐子が嫉妬を含んだ瞳で彼を見詰めていた。

「あの娘きつと、今頃家で同じような事をしているわよ……」

平尾が美佐子に顔を向ける。

彼女は、平尾の股間に手を伸ばし、画面の中の麻美の繰り広げる痴態を見た事によって、再び勃起しはじめた陰茎をまさぐる。

「ダメよ、もうこんなに勃起させて。今日はわたしがあの娘を苛めるんだから……」

平尾の腕が彼女の腰に回され、抱き寄せる。

「判っているって。でも、持ちそうにないかも……」

「ウフフ……、昨日の夜、あんなに絞りこめてあげたっていうの？」

「ああ、足りないみたいだ……」

平尾が仰向けとなった彼女に覆い被さり、両手で乳房を揉んでから、腰に手を這わす。

美佐子の目が細められ、握ったままの陰茎をゆっくりと擦りはじめる。

「固いわ……」

囁く彼女の瞳は既に、快楽の期待にきらめいている。

平尾の指が彼女の陰毛をまさぐると、太股を立てた格好で脚が大きく広がった。

先端の尿道口から滲み出したぬめりで彼女の手が濡れる。張り詰めた亀頭を包み込むように握った手が動き、彼の欲望を誘う。

鋭い快楽に顔を顰めた平尾が、彼女の二枚の肉壁を指の狭間に挟み込んでまさぐりはじめる。

すぐに、手の平の内側に熱いぬめりが触れる。

挿入されてきた指が、膣穴のすぐ内側をこね回し、別の指によって上から押しつぶすように陰核を刺激された時、美佐子が今日初めての熱い息を漏らした。

平尾が覆い被さるように身体を重ね、乳首を啜える。

陰茎を愛撫していた彼女の手が離れ、粘液で汚れたその手で彼の腰をつかみ引き寄せる。

「中にいっぱい注ぎ込んで、あの娘が来たら後始末させてやるから……」

「残酷な女だ、お前は……」

美佐子が妖艶に微笑む。

「嫌い？」

「いや……。良いパートナーだよ」

平尾が腰を進め、美佐子が、膣口を押し広げるようにして挿入されてくる陰茎の感触を味わい、満足気に吐息する。

「ちよつうだい……、いっぱい……」

彼女の平尾の腰をつかむ手が、背中を強く抱きしめた。

ベッドがリズムカルな軋みを上げはじめ。

画面の中では、平尾に尻を犯されている麻美が、快楽とも苦痛ともつかぬ悲鳴を上げていた。

*

ベッドから出ると、膣から溢れた精液が太股を伝い下りていった。

来客を告げるチャイムを聞いた美佐子が、平尾とともに横たわっていたベッドから起き上がった。

全裸のまままで玄関のドアの前まで行った彼女がスコップから外を覗くと、丸く歪んだ麻美の姿が見えた。

鍵を開け、インタホンに話す。

「鍵は開けたわ」

麻美がドアを開けると、目前に現れた全裸の美佐子の姿に驚き、立ちすくむ。

「何をぐずぐずしているの、早く入りなさいよ」

美佐子が、驚く彼女に向かって冷たく微笑みながら言った。

麻美が美佐子から目を背けたまま玄関に入り、後ろ手にドアを締めると、一歩高い所から美佐子が、手を両脇に付いて脚をわずかに開いた姿勢で彼女を見下ろす。

「おはよう、麻美」

まだ美佐子をまっすぐに見れない麻美が、小声で挨拶を返し、そんな彼女に向かってからかうようなような口調で言葉が続ける。

「どうしたのよ、麻美。わたしの身体、みっともなくまっすぐに見れないの？」

麻美が慌てて、顔を上げる。

「いえ……、そんな……。ちょっと驚いただけです……」

美佐子の浮べる妖艶な微笑みが深くなり、脚が更に少しだけ開かれる。膣口から平尾によつて注ぎ込まれた白濁がゆつくり太股に垂れ落ちていく。

脚に視線を向けた麻美が、その粘液の正体に気づき、はっと息を飲む。

「ウフフ……、そうよお前が来るのが遅いから楽しんでいたのよ、平尾先生がわたしの中に沢山注ぎこんでくれたわ。お前の為にな……」

麻美が怪訝な表情を浮べる。

「わたしの為……?」

「そうよ……」

美佐子が麻美に手の差し伸べる。一瞬、彼女は顔を背けかけるが、すぐに思い直して、差し出された手に頬をあずける。

うつすらと笑った美佐子が、頬の柔らかい手触りを楽しむように撫ぜる。

「そうよ、お前に。ペットとしてのお仕事を仕込む為にな……」

美佐子が自分の股間に反対側の手を持っていき、膣から零れ出している精液を指先に絡め取る。「ほら、こんなにいっぱい溢れてきてるわ……」

美佐子の表情と声に欲情の翳りが生じ、彼女は、2本の指の間で白濁した糸を引く精液を麻美に見せ付ける。

美佐子が、その汚れた指を麻美に突きつける。思わず彼女は顔を背けるが、すぐに美佐子がその髪の毛をつかんだ。

「イヤッ」

美佐子が押さえつけた彼女の唇に指先のぬめりを擦りつける。麻美が小さく声を上げ、鼻を突く強い男の精の匂いを感じる。

そんな彼女の表情を見下ろす美佐子が、つかんでいる髪を引っ張って、麻美を引き寄せると、低い悲鳴を上げた彼女が、玄関の床に膝をつく。

目前にひざまづいた格好となった麻美を見下ろす美佐子の、その瞳には新たな欲情の色が浮び上っており、彼女はその欲情の中で麻美に命令する。

「ペットの役目をお果し、舌で綺麗に舐め取るのよ！ 御主人様達が楽しんだ後始末をするのっ」

麻美が脅えた目で美佐子を見上げる。平尾のセックスの後始末を、しかも舌でなんて、そんな惨めな事が出来るはずもない。だが拒否したとしても聞き入れる美佐子ではない事は十分に承知していた。

結局、麻美の口から出たのは、哀願の言葉だけだった。

「許して……、そんな事できない……」

美佐子が、泣き出しそうに歪んだ麻美の表情を楽しげに見下ろし、微笑みを深くしながら、再び彼女の髪の毛をつかみ、無理矢理に自分の太股に顔を押し付ける。

太股に垂れた精液が彼女の顔を汚し、麻美が泣声の混じった声を上げる。

「イヤ……」

麻美の瞳から零れ落ちた涙で美佐子の太股が濡れる。

「もう一度針を使ってあげようか？ 今度はクリトリスを貫いてやるわ……」

自分の行為と声によって更に昂ぶった美佐子が、乱暴に麻美を引き離す。

玄関の土間に座り込んでしまった麻美が、恐怖に脅え切った顔を彼女に向ける。

「お願い……」

美佐子が麻美の目前に立ち、脚を開く。

またしても溢れ出した白濁が、太股の内側をゆっくりと垂れ落ちていく。

「どうするの、針を突き刺されてから舐めるの？ それとも今するの？」

麻美が嗚咽しながら膝を立て、美佐子の開いた太股に触れて、その中心部に向かって顔を寄せていく。

「ああ……」

麻美の息を秘部に感じた時、美佐子は欲情の息を漏らして、彼女の頭を強く股間に押し付ける。

「……………」

くぐもつた声が漏れ、美佐子の脚がもう少しだけ左右に開いた。

「奥までよ……、奥まで綺麗にするのよ……」

美佐子が精液を舐め取る麻美の舌の感触を楽しむ。

その屈辱の行為が終わった後、麻美は玄関に膝をついたまま、頭を深くうなだれる。

そんな彼女に向かつて満足気な声で美佐子が言った。

「美味しかったでしょう、これから3人で楽しむ時は、いつもお前に後始末をさせて上げるわ。わたしのものも、平尾先生のものもね」

美佐子が麻美の顎に手をかけて上を向かせる。

「返事はどうしたの？」

美佐子のその言葉は、優しい調子であったが故に彼女を脅かす。麻美が涙で濡れた顔を肯かせ、小声で返事を返す。

「はい……」

美佐子の微笑みが深くなり、麻美の顎から手を離す。

「随分とお利口さんになったものね、私達のペットは……。この前、この部屋で平尾先生に充分に仕込まれたたしいわねえ」——「でもまだ、ちよっとダメなところがあるようね、私達2人が裸なのに、お前はまだ服を着ているわ……」

麻美が反射的に服の胸元に手をやる。

「脱ぎなさいよ、早く。そしてペットらしく、お前の股間のイヤしい2つの穴を私達にさらけ出してお見せ」

麻美がまだ靴も脱がないうちに、玄関で服を脱ぎはじめる。

ほどなく全裸となった麻美が、脱いだ服を抱えて戸口に上がると、その前に美佐子が、天板に強化ガラスを張った低いテーブルを置いた。片手には既に、黒い1本の線のようにも見える皮鞭を持っている。

「ほら、「舞台」を用意してあげたわよ」

「えっ？」

その言葉の意味をつかみかねた麻美が、当惑した視線を向けた時、美佐子が鞭を彼女の太股に振り下ろす。

太股で鋭い音が鳴り、突然の苦痛に麻美が驚きの声を上げる。

「ペットなら、ちゃんとご主人様の言ったことを聞いておきなさい、さつき命令した通り、このテーブルに上がってお前の汚らしい股間をお見せっ！」

美佐子が再び鞭を振り下ろし、彼女に悲鳴を上げさせる。その苦痛に急ぎ立てられるようにテーブルの上に乗った麻美に、残酷な興奮に昂ぶりはじめた美佐子が言う。

「いちいち説明しなくっちゃ駄目だなんてお前はなんてペットなのっ！ もう一度あのホテルの時のように泣き叫ばせてあげようか、縛り上げて鞭と針で教え込んであげようか？」「いやあ……、

お願いそれだけは……」

美佐子がまたも、無慈悲に鞭を振るい、今度は彼女の乳房を打つ。

「ほらほら、誰がその上で突っ立てっ立っていろっつて言ったのよっ！」

「やめて……、もう……やめて」

麻美が哀願の声を上げながら、テーブルの上で屈み込み、脚を広げていく。

「まだよ、まだ足りないわ！」

美佐子が叫び、鈍い光を湛える瞳で彼女の股間を視姦し、更に鞭をその太股に振り下ろす。

「ああ……」

テーブルの上で麻美が脚を鈍角になるまで開き、股間の薄く翳るような陰毛と、その奥の肉襞を晒け出す。

だが、再び無慈悲な鞭が彼女の裸体を打つと、彼女は絶望の声を上げ、テーブルの端に両手を付き、そこに体重をあずけながら、脚を、脚の付根の腱が浮き上がる程に大きく開く。

無残なほどに開かれた股間では、二つの肉穴が剥き出しとなり、まだ処女の面影を残すかのようについたり合さっていた性器の肉襞までもが左右に割れる。奥の桜色をした秘肉を晒け出している性器のそのすぐ下では、小さく窄まった肛門がいたぶりを待ち受けるようにヒクヒクと動き、美佐子の視線を楽しませる。

「……まあまあ格好ね」

美佐子が麻美の股間と、恥辱に火照る顔を舐めるように見詰めながら囁き、手に持った鞭の先端を彼女の股間の中心に向けて突き出す。

性器に触れた鞭が、肉襞を左右にめくり上げ、陰核を廻りはじめる。

「次に命令に従うのが遅れたら、ここを鞭で、真っ赤に腫れ上がるまで打ってあげるわ……。鞭で傷付いたここに男のものを入れられたら随分と辛いわよ……。でもお前のような女には、それがお望みなのかもしれないわね」

美佐子が操る鞭先が下に向かって動き、肛門に触れる。

「それともこっちの穴でも良いわよ……」

美佐子が鞭を突き出し、肛門に浅く鞭先が突き刺さる。

「あっ！」

痛みに歪む麻美の顔を薄笑いを浮かべて見る美佐子が、鞭を引く。

「オナニーをしてお見せなさい」

「えっ？」

麻美が一瞬、呆気にとられたような顔を美佐子に向けた時、鞭が股間に向かって振り下ろされた。それほど強い調子で打たれたわけではなかったが、剥き出しになっている性器の粘膜を打たれた苦痛と驚きに、麻美が悲鳴を上げる。

「まだわからないのかいつ、お前は！」
美佐子が再び鞭を振り上げる。

「止めてっ！」

叫んだ麻美の性器に再び鞭が食い込む、しかもその勢いは先程よりも強いものであった。振り下ろされた鞭は、性器の肉襞を弾き、陰核を髹しあげ、膣口に赤い一本の線を刻み込んだ。麻美が泣き叫びながら、右手を自分の股間に持っていき、指先で膣口と性器の表面を弄りはじめる。

美佐子が荒く、興奮した息を吐く。

麻美は、美佐子の淫ら要求を果すべく、膣口を掻き分け、その浅い部分と陰核を指先で愛撫する。

麻美本人でさえ以外であったほどに、すぐに腰の奥の部分から、じわりと快感の兆しが湧き上がってきた。

「ああ……」

屈辱され罵られてさえも、いやそれだからこそ余計に反応する自分の身体に、悲しみにも似た感情を覚えた麻美が嗚咽する。しかしその嗚咽でさえ、今の彼女にとっては快樂の為の材料でしかなかった。

低く泣きながら、濡れはじめた性器を弄る彼女に、冷笑を浮かべた美佐子が、鞭先を軽く乳首に触れさせる。

「そろそろイヤらしい汁が出てきたわねえ……」

美佐子が、愛液の糸を絡み付かせはじめている麻美の股間を見て言った。

「ああ……、イヤっ……」

日頃のマスターベーションで自分の敏感な部分を知っている麻美が、指先を膣口に浅く挿入し、軽くかき回すようにしながら刺激しはじめると、淫らに動く指のすぐ上では、陰核が頭をもたげはじめた。

「ほら……、遠慮する事ないのよ、もう一つの手をお使い……」

美佐子の命令に、麻美が上気した視線を向け、こくりと肯く。

半開きとなっている唇が熱い息を漏らし、麻美がテーブルに尻を据え、大きく開いた股間にもう一方の手を伸ばす。その指先が陰核をつまみ上げ、軽く揉むようにして愛撫しはじめと、彼女は喘ぎの声を漏らし、瞳を閉じる。

膣に浅く挿入されている指先が、したたり落ちそうになっている愛液を掬い上げ、短い粘液の糸を内部から引き出す。ぬめった指が更に深く潜り込み、膣壁を内側から擦りだす。

濃い桜色に火照りはじめていた性器の肉が、内側から盛り上がるように蠢く。それは麻美が膣

穴の上側を弄っている証拠だった。

「そこが感じるのかい？」

「はい……。とつても……」

麻美のもう一方の手の指が、芯を持ちはじめている陰核を弄りだすと、彼女は一瞬苦痛とも見える表情を浮かべ、眉を顰め、喉の奥からうめき声を漏らす。

膣に挿入された指が、ゆつくりと前後に動きはじめると、その指を締め付ける膣穴の肉が盛り上がる。溢れ出した濃い愛液のぬめりがトロリと垂れ下り、指の出し入れの度に、ヒクヒクと窄まりを繰り返す肛門を汚していく。

目前で繰り返される麻美のマスターベーションに、興奮の色をあらわにする美佐子が、鞭先を彼女の顎に当て、顔を起す。

「前はそろそろ飽きてきたよ、今度は後ろからだよ……」

麻美が、のろのろとテーブルの上で姿勢を変え、美佐子に尻を向けた格好で膝を立て、尻房の狭間がもつとむき出しになるように、ぐつと腰を落としてみせる。

「ふふつ、分かってきたじゃないの。やっぱりお前のような女は気持ち良くなってくっちゃ素直になれないのね」——「ほら、オナニーを続けるんだよ、後ろの穴も弄ってお見せっ」

美佐子が軽く鞭を目前の尻に振り下ろす。

「ああ……、ぶたないで……」

麻美が媚びるような口調で言い、深くまえかがみとなって股の間から手を回し、再び性器を愛撫しはじめる。

豊かな肉付を持った尻房の狭間が愛液で鈍く光り、指がぬめ光る肉色をした襞を擦る度に淫らかな音が響く。そして指が深く膣穴に挿入されると、肛門が内からの圧力により盛り上がって、半球の円を描く。

「ほらっ！ お尻の穴はどうしたの！」

美佐子が叫ぶと、麻美が背中から手を回し、自らの肛門に触れる。

細く白い中指が、まるでくすぐるかのように肛門の表面を撫ぜ、そしてゆつくりと中に潜りこみはじめる。

「ハア……」

中指を第二関節辺りまで挿入した時彼女は、深く息を吐いて、その背中をビクリと震わせる。半球状に盛り上がる肛門が指先に絡みつき、淫らな動きを見せはじめる。

麻美の膣と肛門に挿入された指が、互い違いのタイミングをとって上下に動きだし、開いた唇からは喘ぎの声と息が発せられる。

そして美佐子がニヤリと笑い、大きく鞭を振り上げた。

「ああ……」

無慈悲な勢いで尻に振り下ろされた鞭は、麻美を絶叫させる。
美佐子が叫ぶ。

「ほらっ！ 早くイクのよっ、お前がイクまで、お尻を打ちつづけてあげるわっ！」

美佐子は幾度も鞭を振るい続け、その都度、麻美の表情が苦痛に歪む。しかし、彼女の両手は自らの性器と肛門を騷り、その快楽を貪りつづける。

「ああ！ ダメ。もうダメっ！ 痛いっ！ 痛いっ、お願いっ！ 許してっ！ お願いっ！」
美佐子が叫ぶ。

「ほらイクのよ。わたしの前でお尻を鞭打たれながら、イヤらしく濡れた2つの穴を弄って、イクのっ！」

「ああ！ ああ！ あああ！」

麻美が絶叫し、快楽と苦痛の声を上げる。そんな彼女の両手はいよいよ激しく股間を騷り、鋭い鞭音に淫らな粘膜の音が混じり合う。

麻美の尻に鞭によって刻まれた赤い線が縦横に走り、その鞭跡に尻の表面に浮んだ汗が染み込む。そこに薄く血が混じりだし、尻を打つ鞭が濡れた音を立てはじめた頃、麻美の全身に激しい痙攣が走り抜けた。

「ああ！ イクっ！ イクっ！ あっ！！！」

ビクリと、広げた股間の筋肉を引きつらせながら、彼女が絶頂を告げる声を振り絞った。

その究極の一瞬の後、彼女の全身から力が抜け、愛液にまみれた手が股間から力なく垂れ下った。

テーブルから下りて床に倒れ込み、まだ荒い息に細い肩を上下させている彼女のすぐ前に、美佐子が脚を広げた格好で立つ。

麻美が、尻を打たれながら激しく達してしまった恥辱と、まだ身体の中でくすぶりつづける快楽とによって上気している瞳で、彼女を見上げる。

美佐子が誘うように脚を広げ、手で秘肉を左右に開く。麻美の目前に、黒々とした陰毛に飾られた性器が写る。そこはまだ平尾によって注ぎ込まれた精液の残滓と、そして新たな昂ぶりによって滲み出した愛液によって淫らな光でぬめっていた。

美佐子が麻美の顔をつかんで、自分の股間に引き寄せる。

「うっ……」

肉壁によって唇を塞がれた麻美が、苦しげなうめき声を上げる。

「今度はわたしを満足させるのよ、その舌でね」

美佐子が、抵抗する彼女の頭を強く股間に押し付ける。

「舌を挿し込んで中を舐めるのよ。仕込んであげるわ、舌の使い方をね」

「いやっ……」

まだ抵抗を止めようとはしない麻美に、美佐子が強く鞭を振り下ろしはじめる。低く潰れた悲鳴が股間から聞え、鞭跡が細い身体に刻まれていく。

美佐子の汚れた性器に、麻美が舌を這わしはじめると、彼女はようやく鞭を止めて広げた太股の内側に両手をかけ、その肉を左右に引いた。更に剥き出しとなった秘肉に麻美が一瞬躊躇するが、彼女は瞳を閉じ顔を深く埋めていく。

「あああ……」

嗜虐と快楽によつて美佐子が声を上げ、その腰が麻美の顔に擦り付けるように動き出した。膣穴の中に舌が挿し込まれ、くねりはじめた。

瞳を閉じたまま美佐子の性器を舐める麻美は、美佐子の秘めた部分の粘膜の舌触りと、女の蜜の味とぬめりを味わう。その微かに塩辛く生臭い味と、同性の性器に舌で奉仕されているのだという、惨めさを強く意識しながらも、彼女の舌は更に深く膣穴の奥をまさぐり、美佐子の淫らな要求に応えつづける。

美佐子が、彼女の舌の動きに熱い息を吐きはじめ、そしてそこから生じる、もどかし気な快感に、強く嗜虐心を昂ぶらせていく。

瞳に残酷な光が灯り、自分の下腹部にまとわりつく麻美の後頭部に手をかけて、力まかせに押し付ける。

「もつとよ、もつと強くするのっ！」

麻美の唇と鼻が、美佐子の股間の秘肉によつて塞がれ、呼吸を止められた彼女が必死で抵抗する。苦しい悲鳴が股間から漏れ、その声に美佐子が更に昂ぶる。

「ああ……、深く入れるのよ！ 舌を根元まで入れなさいっ！」

麻美が、つかまれている髪の毛の苦痛に喘ぎながら、美佐子の命令に従って舌を深く挿入する。舌に彼女の膣壁の蠢きが感じられ、鼻先に固くなった陰核の尖りが触れた途端、一際激しく快楽の叫びを上げた美佐子が、力を込めて鞭を振り下ろす。

「わたしをイカせるのっ！ わたしがイクまで鞭は止めないわよっ」

麻美は、振り下ろされる鞭の苦痛にすすり泣きながら、懸命に舌の奉仕を続ける。濃く粘りのある愛液と、自分の口から漏れだした唾液とで唇が濡れ、断続的に蠢く膣穴が舌を捻り上げる。

美佐子の股間で淫らな肉音が立ち、麻美が顎が痺れる程に激しく舌を動かす間に、彼女は何度も小さな絶頂の波を味わっていた。しかし望んでいるような、深く大きな絶頂はけっして訪れる事はなかった。その気の狂いそうになる程のもどかしさが美佐子を更に残酷にしていく。次第に振り下ろされる鞭の振りが大きくなり、それが限界に達した時、彼女は麻美の髪を鷲掴みにし

て自分の股間から引き剥がし、床に押し倒した。

涙に濡れ脅える視線を向ける麻美に、美佐子が叫ぶ。

「このペットはご主人様を満足させる事も出来ないのねっ！」

「そ、そんな……。ゆ、許してっ！ 許して下さい」

その懸命に哀願する麻美の姿に、美佐子が舌舐めずりをするような表情を向け、残酷に言放つ。

「お前の汚らしい股の二つの穴、無茶苦茶にしてあげるわっ」

「イヤァ！」

麻美が叫ぶ。

*

背中に触れるガラスの冷たさが身体に染み込んできた。

テーブルの上に、身体を縛り上げられた麻美の身体が乗せられた。仰向けとなった彼女の姿は、左右の足首にそれぞれの手首が麻縄で縛り付けられており、その脚を乳房に触れる程に曲げられた、股間の全てをさらけ出す淫らなものだった。

恐怖と恥辱の表情を向ける麻美を、先ほどからの彼女と美佐子の行為を見詰め昂ぶっていた平尾が見下ろす。

「良い格好だぜ、麻美」

「お願い、酷いことしないで……お願い……」

掠れた声で哀願する彼女の傍らに膝を付いた彼が、広がった肉襞の狭間に手を触れる。

「あぁっ……」

敏感な粘膜と、更に敏感な肉の突起を指がこね回すように弄りだすと、彼女はすぐに反応を示す。

濡れた指先を麻美の頬に擦り付け、平尾が低く笑う。

「酷いことしないでっ？」

からかう口調に彼女が顔を逸らし、その頬を平尾の手が強くつかんで自分に向き直させる。

「淫乱女……」

囁いた平尾が、麻美の唇を貪るように奪った。

「うう……」

唇を舌先で割られた彼女がうめき、そして舌がからまりあった。

テーブルの上で淫らな格好で固定され、濃厚な口付けを受ける麻美の上で、美佐子が、込み上げる欲望とわずかに混じる嫉妬を込めた声で低く囁く。

「泣き叫ばしてあげるわ……」

それは彼女の麻美に対する一種の羨望だったのかもしれない。

平尾の口の中で、麻美が低い声を上げた。

美佐子が、大きく開かれたままで固定された麻美の股間に向けて鞭を打ち下ろす。

「うぐっ!!!」

平尾の口によつて塞がれているために、麻美の唇からはくぐもつたものとなった叫びが漏れ、身体が弾かれたように動く。その身体を平尾の手が押さえつける。

鞭は彼女の性器と敏感な粘膜に赤い傷を刻み込んでいた。

開いた麻美の瞳が涙に濡れ、必死の表情で平尾に訴えかける。だが彼の舌は更に深く彼女の口内をまさぐり、舌を絡め取るだけであつた。

再び美佐子が鞭を振り上げると、麻美は次にやってくる苦痛に耐えるように固く瞳を閉じ、押し出された涙が頬を伝い落ちた。

「うぐっ!」

麻美の身体が再び跳ね上がり、鞭が秘肉を打つ音にくぐもつた悲鳴が重なる。

それが更にもう一度繰り返されたとき、平尾が顔を上げた。

荒い息に身体を波打たせ、彼を見上げる麻美の瞳には哀願と、そして確かにそこには欲情の色合いが込められていた。

「お願い……」

平尾が麻美の膝を掴み、体重をかけながら、股を裂くような勢いで更に開く。もうこれ以上ないというほどに左右に裂かれた肉襞の奥から秘肉が弾けだし、そしてその下では肛門が捲れ上がる。

「尻の穴もだ、美佐子」

「ええ、判つてるわ……、2つともなめしあげてやるわ」

美佐子が答え、鞭を大きく振り上げる。

「ああっ!」

麻美が絶望の声を漏らし、再び固く瞳を閉じた。

美佐子の振るう鞭の音、昂ぶりに荒れる平尾の息遣い、麻美の絶叫と許しを乞う叫び声。

まだ朝の雰囲気が漂う光が満ちる部屋で、テーブルに固定された全裸の娘の身体を陵辱する男と女。その光景はさながら一枚の淫らな絵のようであつた。

血と、苦痛の汗が混じつたものが、ガラステーブルの表面に点々と飛び散り、無残に傷つけられた股間に、もう何度目かも判らなくなった鞭が、またもや振り下ろされる。秘肉が弾け、陵辱

される身体が震え、泣くことさえも出来なくなった麻美は、ただ甲高いうめき混じりの荒い息だけを繰り返す。

美佐子が、一旦振り上げた鞭を急に床に投げ捨てる。

「ダメ、もうダメ、もう我慢できないわ」

そう言った彼女の瞳は、激しい興奮に底光りするような光を放ち、その太股の付け根は、溢れ出した愛液によって濡れ光っている。

美佐子が麻美の前に回り、その顔の上に広げた股間を持って行く。

「もう一度舐めるの。今度満足させなかつたら、わたし、もう何をするか分からないわよ」

したたる寸前にまで愛液を湛える美佐子の性器。その肉壁の狭間に向けて麻美の舌が伸びる。

「ああ……」

肉の突起に舌が触れたとき愛液が溢れ出し、麻美の唇に向かって伝い落ちる。美佐子の腰が下がり、その両手は握り潰すほど強く、自分の乳房を揉みはじめた。

そんな女達を見ていた平尾が、麻美の広がった股間に回り、床に屈み込む。

「愛液じゃなくて、血で濡れたここもなかなかの見物だ……」

平尾が、目の前の傷ついた性器に手を伸ばし乱暴に弄り始める。そこには、何本もの赤いみみず腫れが走り、傷つけられた膜からは薄く血が滲みだしている。

平尾は指先に着いた血と愛液の混ざり合ったものを舌で舐め取り、興奮に昂ぶった笑いを漏らながら立ち上がる。その股間では、勃起しきった陰茎が凶器のようにそそり立っていた。

麻美の唇を犯す美佐子が、腰を回すようにして前後にゆすりはじめ、激しく濡れた性器を彼女の顔に擦り付け、快樂の声を上げる。

「もっとよ、もっと強く舐めるの。舌を入れるのよ、奥まで、奥まで舐めるのっ」

平尾が、張り詰めきった亀頭を麻美の、血で濡れた膣口に押し当てる。

それを感じた麻美が股間を緊張に震わせ、膣穴と肛門がヒクリと蠢く。彼女の膝をつかんだ平尾がゆっくりと腰を進めると、傷ついた膣穴を押し開くように固い亀頭が埋まっていく。

美佐子の股の下で、麻美が苦痛のうめきを上げる。

陰茎を根元まで収めきった平尾は、粘りつき強く締め上げてくる彼女の感触に強く欲情する。

そしてその昂ぶりのままに彼は激しく腰を使い始める。ただでさえまだ狭い彼女の膣穴が、鞭でなめされた苦痛と、そして女の性のように沸き上がる肉の快樂のもとで更に強く収縮し、陰茎に絡みつく。

「うっっ！」

重いうめきを上げた平尾が、更に激しく麻美を責めたてる。

麻美は、彼が突き入れてくる度にぐもった悲鳴を上げ、身体を震わせる。しかし、唇から伸ばされた舌は美佐子の性器を愛撫する動きを止めることなく動き続け、途切れなくしたたり落ち

てくる愛液を舐めとっていく。

平尾が、感じている快感を如実に示す息遣いとなり、腰の動きが早まる。

彼の目が、陰茎によって陵辱される傷ついた麻美の性器を見る。そこには、愛液のぬめりを滲ませる肉襞と、その肉襞の狭間に出し入れされる、愛液と血で濡れた自分の陰茎があった。

平尾が狂暴な程の昂ぶりを覚え、低くうめく。

彼はそれから数度、強く麻美の中に突き入れた後、腰を引き陰茎を抜き出す。中断された快感に固く勃起した陰茎がヒクヒクと痙攣し、その先端から透明な粘液をしたたらせる。

平尾が今まで突き入れていた麻美のそこは、半ば開き快楽と昂ぶりによって充血した内部をさらけだし、陰茎を求めるかのように蠢いていた。

平尾が、ベッドの横に脱ぎ捨てた服のポケットからライターを取り出す。

再び麻美の股間に屈み込んだ彼は、ライターを点け、興奮によって瞳孔が開き加減となった目で、そのオレンジ色に揺らめく炎を見詰める。喉からくぐもった笑い声が漏れだし、ライターの炎が、麻美の性器に近づけられていく。

その光景を見詰める美佐子が、興奮のあまり驚づかみにしている自分の乳房の頂点で突き立っている乳首を強く指で押し潰す。

平尾の持つライターの炎が、麻美の肉襞に触れ、その表面を炙る。その途端、麻美が秘肉をあぶられる苦痛に叫び、折り曲げられた脚を激しく揺さぶる。

上げる叫びを押さえ込むように美佐子が、股間を彼女の口に押し付け、擦り付ける。

平尾は、ゆつくりとライターを動かし、炎で麻美の股間を炙っていく。瞬く間に滲みだしていた愛液が乾き、血が茶色に、そして桜色の粘膜が白っぽく変色する。

続けて彼は、ライターを下に動かし、その炎の試練をもう一つの窄まりに加す。肛門を炎に舐められた麻美が再び押し殺された悲鳴を上げ、反射的に肛門が窄まる。

平尾は、麻美の身体の苦痛による痙攣を十分に堪能した後、ライターを投げ出し、再びその膣口に陰茎を押し当てる。

「ああっ！」

その様子を食い入るように見詰める美佐子が絶叫する。

「無茶苦茶にして、この娘の身体、無茶苦茶にしてやって！」

平尾が腰を進める。

傷つけられ、焼かれた膣穴に陰茎を挿入される苦痛に、麻美が全身を激しく痙攣させ喉の奥から張り裂けんばかりの苦痛の声を上げる。

平尾は、その悲鳴を聞きながら憑かれた者のように激しく腰を振り、鞭と炎によって陵辱された性器を責めたてる。激しい苦痛の為に、今まで以上の強い膣壁の締め付けが彼の陰茎に絡みつき、その快感と嗜虐の昂ぶりによって、平尾は急速に射精へと向かう。

美佐子が、麻美の顔に押し付け付けた腰をこね回すように動かし、顔に愛液を塗り着けながら、身体を激しく快感によじる。

射精を寸前に感じた平尾が、強く麻美の股間に下腹部を叩きつけ、陰茎を深く突き入れる。亀頭に触れた子宮が振るえ、尿道に引きつるような快感が走る。

その瞬間、平尾は射精し、声にならない程に重いうめきを発する。陰茎がビクビクと痙攣し、その度に大量の白濁がほとばしる。

そしてその瞬間、美佐子も又絶頂の声を張り上げていた。

力尽きた麻美が、慈悲の失神に身をゆだね、その首がガクリとテーブルの上に落ちた。

放心したように床に座り込む美佐子の前に、平尾が歩み寄る。

問い掛けるように向けられた目に、彼が股間の汚れた陰茎を突きつけると、なんのためらいもなく彼女の唇が開き、垂れ下がったそれを啜えた。

唇の狭間に挟み込んだ柔らかな肉を、扱き上げるように前後にゆれだした美佐子の頭に平尾の手がかかり、彼の足が失神する麻美の横たわるテーブルにかかる。

開いた股間の垂れ袋に美佐子の手が触れ、唇の動きに合わせて軽く摩りはじめる。

平尾が低いうめきを漏らす。

唇に挟まれた陰茎が、徐々に力を取り戻した頃、美佐子が股間から顔を離して、すっかり汚れが舐め取られた陰茎を捧げ持つように手で摩り、彼を見上げた。

「ねえ、麻美を起こさない？　そして二人して舐めてあげれるわ……」

「そうだな、それも良いか」

薄い笑いで応える美佐子の顔には、既に淫らな昂ぶりがあった。

平尾がテーブルの上の麻美の脚と手を拘束している縄を解き、床にひきずりおろすと、彼の腕の中の麻美は、低い声を上げただけで、その瞳は閉じられたままだった。

美佐子が床に転がったライターを取り上げる。

「押さえていてよね」

シュと低い音とともに、ライターにオレンジ色の炎がともる。

「どこを？」

「同じ所じゃ、楽しくないわね」

平尾が背後から麻美を抱く手に、力を込める。

麻美の前に屈み込んだ美佐子が、ライターの炎を目前の乳首に近づけた。炎が乳首に触れた途端、麻美が声を上げ、そして次の瞬間、感じた熱さに完全に失心から覚め、身体を反射的に引く。

平尾が背中から強く麻美を押えつけ、美佐子が再び乳首をあぶりはじめる。

「あああつ！　止めて、やめてっ！」

激しく身体を揺すり、髪の毛を振り乱して絶叫する彼女を、美佐子が楽しげに微笑みながら見詰め、そしてライターの炎をもう片方の乳房に触れさせる。

「ぐっ！」

平尾の腕の中から飛び出してしまうかと思われるほどに、麻美は身体を弾けさせ、悲鳴を振り絞る。

二つの乳首を刺りつくしたライターの炎を、美佐子が吹き消す。

涙で濡れる麻美の顔を見詰めながら、彼女が囁く。

「もつと焼いてあげようか？」

「イヤ、もうイヤ、止めて……、止めて下さい。お願いです、熱くて、辛くて死んでしまいます……」

「大袈裟な娘ね、お前のおそこも、今刺ってあげた乳首も、あの程度ならまだ水脹れも出来やしないわよ」

「……そんな……」

「フフツ、まあ良いわ。これからもつと仕込んであげるわ、もつと辛いことにも耐えられるようにね。」

「ああ……」

うなだれた麻美の剥き出しの股間に美佐子が手を差し込み、乱暴に、傷ついた性器と肛門を刺りはじめる。窄まる肛門を無理矢理に押し開き、指をねじり込んでいくと、麻美がその苦痛から逃げるように身体を逸らす。平尾がその動きをやすやすと押さえ込む。

麻美が引きつるような苦痛を覚え、叫ぶ。

「ああ！ 止めて、お願い」

笑う美佐子が、指で肛門の内部を弄りながら囁く。

「それに、まだここでのお勤めが残っているのよ……」

その言葉を聞いた麻美が、苦痛に表情を歪めながらも、奇妙に感情のこもらない声で呟く。

「あああ……、まだ足りないのね……、これだけわたしを苛めても、まだ満足してはもらえないのね……」

「そうよ、こんなものじゃないわ。これからのお前の生活はね……」

麻美が刺られ続ける肛門の痛みと、そして美佐子の言葉に唇を噛み、がつくりとうなだれる。だが、すぐにその顔は上がり、目前の美佐子を見詰める。

「何をすれば良いのですか……?」

麻美がぼつりと呟いた。

自分の運命に観念し、うなだれる麻美から手を放した平尾が立ち上がり、女達の行いに更に勃

起している陰茎を美佐子に向けた。

すぐさま彼女は突き出された陰茎に触れ、竿の部分を手の中に挟み込む。手がゆつくりと前後に動き出し、赤黒く張り詰めた亀頭の表面を唇から伸ばされた舌が舐めはじめの。

一声うめいた平尾が傍らのテーブルの上に足を乗せて、背後の麻美の顔を尻の狭間に押し付ける。

「舐めろ」

麻美が恐々に舌を伸ばし、平尾の肛門に触れさせる。

「丹念にだ、丹念に舐めろ……」

動きはじめた麻美の舌に、その彼の声は微かに掠れはじめていた。

亀頭の先端から透明な粘液が滲み、それを長い糸を引きながら美佐子の舌が舐めとっていく。

平尾の手が動き、後ろの麻美の顔を強く尻の狭間に押し付ける。

「もつとだ、もつと舐めろ」

苦しげに息を吐く麻美の顔が揺れ、髪の毛が太股をくすぐる。舌先がまさぐるように肛門を舐める。

「うう……。挿し込め、舌を入れろ」

快樂の荒い息を吐きはじめて平尾の亀頭の先端からは、溢れ出す程に粘液が漏れ、美佐子の手を汚していく。

美佐子の唇が開き、亀頭を包み込むようにして啜え、頬が窄むほどに吸い上げながら舌を絡める。

「ううっ！」

麻美の舌が肛門を割り、中部に潜り込んでくる。

美佐子の顔がゆつくりと前後に動き出す。